

野木小同窓会報

第 10 号
平成8年12月
野木小学校同窓会編集部



同窓会長 田中栄一
(第37回卒)

ご挨拶

会員の皆様御無沙汰致しておりますが、益々ご健勝にてご精励の事と拝察致します。今年の夏は例年にならない暑い毎日でしたが、秋風がそよぶく今日この頃、この野木の里も、学校の周辺はよく稔った稲穂の黄金色の中に白亜の校舎が眩しい程の太陽の光を浴びて輝いております。

今年も故里の唯一の会報として皆様に育てて頂いて第十号を発行させて頂きます。会報発行も益々充実を増し、着実に実績を伸ばし続けられま

す事は、会員の皆様の多くの方々からのご投稿のお陰です。茲に厚く御礼申し上げます。幼い頃の小学校時代の思い出は、私等人生の最も発育ざかりの若い頭の中に織り込まれ、頭の奥深くしまわれています。学校は巣立った人の思い出の宿であり、心のふるさとでもあります。この思い出

多き野木小学校も昔の木造建築から近代的な校舎、体育館、プール、立派なグラウンド等施設、設備がなされ、昔の面影を一新しております。学校は子供の教育の場であると同時に、地域のシンボルとして、その時その時の人が大切に守り、多くの方々の善意や熱意によって今日に至っております。

野木小学校同窓会員の皆様には、益々ご健勝にてご精励の事とお喜び申し上げます。私は、本校にお世話になつて二年目を迎えさせて戴き、児童百八名、職員十三名が毎日完備された施設、環境の中で学習に専念できますこと、大変有難く深く感謝申し上げます。



学校長 西川正弘

ご挨拶

すことを思う時、先人に対して深い感慨を覚えずにはおられません。全国各地でご活躍の同窓会の皆様、帰郷の切は是非野木小学校にお立寄り下さい。近くに住んでおられる方、道行

く方々も自動車の中からでもわが故里を想う心のより所として何時迄も野木の里を見守つて下さい。最後に会員一同様の益々のご活躍とご多幸をお祈り申し上げます。

の学力向上にもつながると考えています。家庭や地域の人々とかかわりながら、一人ひとりが主体的に学習に取り組み、まとめたり考えを深めたりすることによって学ぶ力が身につくと考えて、研究主題を設定した訳です。

研究実践校についての研究主題について簡単に述べさせて頂きましたが、同窓会員の皆様方には、色々とお世話になります。色々とお話しを申し上げます。

今年度も、会員各位のご協力と、田中栄一会長を中心とした役員各位の献身的なご努力により、会報第十号が発行されることに対し、心から敬意を表しますと共に、これを機に本会の一層のご発展を心から願っております。

最後になりましたが、同窓会会員各位のご健康とご発展をお祈り申し上げ、ご挨拶にかえさせていただきます。



心のふるさと

第31回卒(昭和15年)

上野木

町議会議長 前 野 栄 治

私は今年の四月の緑の日に敬老会に入会をいたしました一年生の老人です。その時の敬老会では小学生の皆さんによる演芸を見ながら、六十数年前に本校の生徒として入学し、サイタサイタ、スクラガサイタと習い初めた頃のことを思い出しました。今日まで育てていただいた諸先生に対して感謝の気持ちでいっぱいです。一年生の担任は高岡先生でした。遠足に瓜割の滝へ行きました。そのときの水の冷たさ。運動会に家族のみんなに励まされて一生懸命走った五十米走。二年生は奥本先生。三年生の時に新教室(木造)と体育館が竣工して、建前の餅が目の前に転がってきて手の出る思いで見学した事。学芸会の練習。四年生は畠中先生で油絵を習い、夢中で取り組んだこと。五・六年生は舟木先生で珠算をしぼられた事や、バレーボールでは恐ろしい野原先生に七屋の地蔵さん何しとるとよく指導されたこと。そして遠敷郡下の体育

会に四〇〇米リレーで優勝した楽しい思い出が次から次へと浮かんでまいります。私は卒業式には毎年出席しています。すばらしい式典で子供たちもこの感激を生涯胸に刻み付けることでしょう。いつも感動しています。

私も同じ思いで卒業し遠敷農林学校に進学しましたが、そこには配属将校による徹底した軍事教育がありました。お国の為に命を捧げる事を誇りに思う毎日でした。敦賀連隊に入隊して数日で終戦。世は軍国主義より三百六十度転換して民主主義とよぎなくされ、戦後の復興と食糧増産に励んだのであります。偽政者の指導と教育によって国民の精神も生活もすべて変化し、教育の重要さをしじみと知った次第です。

今や我が国は世界の先進国として位置付けされていることは周知の通りであります。故に我々は世界で一步先じなければならぬ。もの真似では後進国に追抜かれます。創造力のある子供、そして苦境に耐えて生きぬく根性のある子供を育てていただきたい。教育によって人は変わる。しかし、正しい教育によって人材を育成すれば歴史が物語っている様に改革も可能であります。

私も議会人として住民福祉に微力を捧げておりますが、行政に対して教育に予算を惜しむなど日頃から申しております。

野木小学校の歴史を調査すると、昔は杉山・堤は起新小

旧職員からの便り

健康習慣の元野木校に感謝

塚 本 巖



学校、兼田・武生・玉置三集落で恵懐小学校、三野木は宮野小学校となりました。明治四十二年に合併して野木小学校となり現在に至っています。野木文化の発祥の地をそして野木の偉人たちやすばらしい事業の足跡を後世に伝承される様にと元の名を取り恵懐公園を造成しました。野木小学校より巣立つ子供たちよ、そして、同窓生の皆さんこの公園に立派な記録が出来る様頑張りましょう。

私は七十四歳の高齢ながら人々に「お元気ですね」「若い時と少しも変わっていない」などと言われる程健康に暮しています。生まれつきそんなに丈夫でなかった私がこうなったのは、ずっと続けている色々な健康習慣のお陰だと思います。その健康習慣は私が野木校に教諭として三年、校長として五年勤めていた時に身

につけたものが元になっています。その一つは冷水摩擦。二十九歳頃野木校に着任し、体育主任と保健主事を担当しました。そこで、「野木の子はみんな風邪をひかないように乾布摩擦を」といったからには野木の子に嘘をついてはならんと私は続けました。今では冷水摩擦ですが、ずっと続け

て四十五年になります。次はテレビ体操。当時野木校では業間体育にラジオ体操の第一と第二をしていましたが、第二の九番目の体操を正しく効果のあるようにするにはどうするかはつきりしません。それで色々な人に色々な所で尋ねましたが誰も教えてくれません。こんなことでは野木の子にはすまないと思いつつ他校に転動して十余年たつてしまいました。そして熊川校に勤めていた時のある宿直の朝、何気なく宿直室のテレビを入れました。するときれいなお嬢さんが三人ラジオ体操をしているではありませんか。しかも第二体操を。私は天にも上る気持ちでじつと見入りました。十余年来気にしていた九番目の体操もはっきり見られました。そして野木校で教えていたことが間違いでなかったことにホッとすると同時に、毎朝六時三十分からの十分間、朝のテレビ体操が私の健康習慣に組み入れられました。以来二十数年続けています。最後に歩くこと。校長となって勤めるようになって二キロを五年歩き続け、続いて上中では四キロを四年歩き通しました。今では

一日に三〜四キロは歩くことにしています。
野木校の整然とした建物と広々とした校庭をうちの山か

事務局回顧

神野小 大道定 雄

平成四年から、何かと会員さんをはじめ地区の皆様方にお世話になりました。

それまでの二十五年間は中学生相手の教育にあたっていきましたので、子どもたちとの勉強や学校生活が新鮮で興味深く、しかも楽しく取り組み、貴重な四年間でした。

ところで、私は同窓会の事務局ということで、毎年の会報発行や五年に一度の誌発行にその仕事に関わらせてもらいました。

いつも六月頃に、第一回の編集委員・幹事の合同編集会議が持たれ、編集方針や内容骨子を決定し、直ちに該当の会員さんや準会員さんに出筆の依頼が発送され、八月から九月にかけて原稿が届き、ゲラ刷り用のワープロ編集にかかります。全原稿がそろると紙面構成の段階に入り、写

ら、又道路を通りながら眺める度に「私の健康習慣の元を作ってくれた野木校よありがと」と心より感謝しています。

真やカット等の吟味、校正へと作業は進みます。また、会員名簿の点検、特に地区外会員さんの住所の変更・正誤等のチェックが、各集落担当の理事さんをお願いして進みます。吟味の上にも吟味を重ねて進めても、完全な名簿はなかなか出来ません。

十二月中旬に会報を送りました。年が明けた時分から、宛先不明・転居先不明等の封筒が三部、五部と毎日のように返送されてきますと、申し訳けない気持ちと、事務局としての力不足に気が重くなったことを思い出します。

嬉しいことは、待つてましたとばかり快く出筆を引き受けて下さる会員さんに接したときや、「そんなんでしたら書きましよう」と断り分の代理を追加依頼したときに、早々と原稿を届けて頂いたこと

等たくさんありました。

また、理事会や編集委員会の会終了時、会長さん方から率先して湯呑み等の片付けを手際よくされ、恐縮するやら感心させられたことです。どなたも職場や地域では重要な役どころに就いておられる方々ばかりなのに、極々当たり前に体を身軽に動かされている様子は、特に強烈な印象として、私の脳裏に焼き付いております。

私の事務局としてのほんの一面を書きましたが、いい経験をさせて頂いたと思っています。野木小同窓会・会員皆様の今後益々のご発展を願っております。

大好きな私のふるさと野木

左 近 初 恵

満々の清流を湛えた北川が野木の里をゆったりとめぐり、四季の移り変わりを川面に写し出す様子は、見る者にやさしいやすらぎを与えてくれます。

今から三十年前、昭和四十年、新米教師の私を迎えてくれたのがこの自然一杯に恵まれた野木小学校でした。校舎は木造二階建て屋根も瓦葺きでしたし、『二十四の瞳』の舞台になった小豆島の岬の分校のようだったので、ヒロインの大石先生になったような感傷的な気分になっていました。

その年、県の体育研究指定を受け、体力作りに燃えましました。野木小は児童数も百八十名余りと活気に溢れていました。ソフトボールや鼓笛も右に出る学校がなく、町内をならしていました。継続は力なりといいますがまさにその通りで、放課後は毎日、日没まで練習に明け暮れていたようです。

また、学校と地域の結びつきも深く、毎日誰となく学校

を訪問して下さったようです。

今、学校では開かれた学校とか地域との連携とか叫ばれています。以前から日常的に行われていたのです。

野木には人と人との間に温かい人情が昔も今も変わらず流れています。

このすばらしい野木の里がますます発展されるようお祈りしています。



小学校の思い出

第34回卒(昭和18年)

兼田 桑原 壽美

私が入学したのが昭和十三年四月、田邊校長先生の時だと記憶しています。

校庭の前に狭い川があり、石橋を渡ると現在裏門に建っている門があり『野木高等小学校』と書かれた札がはめ込んでありました。校門を潜ると右手に奉安庫があり左正面に二宮金次郎の銅像が建っていて登・下校の際には必ず一

礼したものです。親の手助けをしながら勉学に励まれた姿だと思えます。

一年生の時は故奥本すが先生に教わりました。大きい声の先生で全学年の唱歌を教えて居られました。又生徒が失敗すると「ばかすけ」と言われる先生もおられました。今は懐かしく思い出しています。

戦時中だったので四年生頃からは出征兵士の見送りや戦死された方々の村葬が講堂で行われました。学校内の先生も出征されました。毎月八日は大詔奉戴日で、金劔神社や波古神社へ武運長久祈願にお

詣りし、又戦勝のあった時は日の丸の小旗行列をして祝った事も覚えています。食糧増産の時代でしたので、春秋の農作業の時は農繁休暇があり、手伝いをしました。

しみ乍ら老齡の日々を送っています。

思い出

第36回卒(昭和20年)

武生 山形 操

今年も猛暑の夏でしたが、庭先の夏花(マリーゴールド、松葉ボタン、百日草、千日草)が、この間の久し振りの雨のお陰で色あざやかに咲いています。

野木小学校を卒業してから早や五十余年の歳月がたった今、静かに小学校時代を思い浮かべてみますと、いろいろとなつかしい思い出があります。

今年二年生になる孫の姿を見てなつかしく思い出するのは、年に一度の学芸会のことです。特に思い出が多いのは、『楠木正成と正行の桜井の親子の別れの踊り』です。正成の役は池田志ず枝さんで当時五年生、正行の役は、当時二年生の私でした。志ず枝さんは、鎧兜に身を固め腰には剣を差し、私は赤い着物に、姉に縫ってもらった袴をはいて、悲しい親子の別れの場面を踊ったのでした。岡本秋先生の指

導で毎日放課後練習しました。が、なかなかむずかしくて覚えられなかったことを思い出します。先生の御苦労は大変だっただろうと、今は感謝の念で一杯です。学芸会の後、瓜生小学校でも学芸発表があり、大勢の人の前で発表させていたたく事が出来たのも忘れられない思い出です。

また、三年生の頃になりましたと、だんだん大東亜戦争が激しくなり、若い男の人は出征され、家に残るのは年寄り、女の人、子供だけでした。学校では、戦争に勝つために氏神様へ参拝し祈願しました。

出征兵士の人には、千人針と言って白いさらしの布に千人の女の人が赤い糸で心を込めた結び玉を一人に一玉ずつ縫って、次の人から次の人へと廻して縫い上げ上げました。井根山まで日の丸の小旗を振り乍ら、兵隊さんをお送りしました。食糧増産の為に

校庭にはさつま芋、南瓜が作られ、兵隊さんの食糧にする為にイナゴを取り、布の袋に竹の筒をつけて一杯になると学校へ持って帰って大釜で茹でて乾燥しました。米は強制的に供出せねばならないので百姓をし米を作り乍ら自由にできず、御飯にさつま芋や大根を小さく切って混ぜて頂きました。出征兵士のお家へ学校から四、五人ずつ何班かに分れて稲刈りの手伝いに行き、細い畦道を稲を背負って稲木場まで運んだ事も思い出します。



現在、孫の通っている学校には、プールやランクルームやとても広いグラウンドがあり、私達の頃とは施設設備の面では大きな違いがあります。また、世の中も平和で、欲しい物はすぐに手に入ります。しかし、昔から変わらないものが野木の里にはあります。野木山、箱ヶ岳などの緑なす山々、秋には黄金色の稲穂が波打つ田圃、悠々と流れ行く北川、そして、温かい人情がそれです。

最近では機械化が進み、子供達が農作業を手伝う事が少なくなりました。我が家も農業をしておりますが、稲の育ち

方等を孫はあまり知らないのではないかと思えます。学校では、そんな現状を察せられたのか、一人一人にバケツで稲の栽培を始められました。夏休みの間、家に持って帰り観察しています。ハナエチゼンの穂が出たことを話しますと、「ぼくのはまだやね、ちよつと植えるのがおそかったしかな。」と返事をしました。又、三年生の子の稲の品種もコシヒカリだということを知

っています。自分の住んでいる地域の作物を知る学習はすばらしいことだと感じています。親から私、そして娘から孫と、代々野木小学校で学ばせていただき、これからお世話になる事と思います。恵まれた環境と温かい人情にあふれた我が野木地区と野木小学校がますます発展される事をお祈り申し上げます。

ふるちゅう農業のいっし



第45回卒（昭和29年）

杉山 竹村 洋一

岡山にある中国四国農政局に勤めています。そして土、日曜は家族のいる京都へ帰っています。家族といえは八十歳を過ぎた母が健在で杉山の家を守ってくれます。農政局では、ふるさとに一番近い近畿農政局勤務が長かったのですが転勤がはじまり、金沢二回、東京、名古屋を経験し、岡山も二回目です。又、大阪にある住宅都市整備公団に一時出向し、これは京都から通っていました。高校卒業後、当然のことと

思い出します。圃場整備、機械化が進み、技術が進歩しました。米作でみると労働時間が当時十アール当たり全国平均で百七十時間であったものが現在四十数時間と四分の一に減り、収量は四〇〇キログラム水準から五〇〇キログラム水準へ向上しています。農家の努力のためものです。しかし一方で、食料の自給率はカロリーでみて八割あったものが五割を下まわっています。穀類では三割程度です。輸入に頼っていますが、いつまでも安全に確保される保障はありません。しかも農村の現状をみると農業従事者の高齢化など現在の生産水準を維持する事さえ困難な状況にあります。田園まさに荒れなんとす。農業基本法の見直しは粗上に乗っていますが、農業をもっと大切にす方向が示される必要があります。基本法見直しでは一般に、輸入を前提とした議論になっており心配なところではあります。私は、やがて退官の時期をむかえます。ふるさとに帰れる喜びで一杯です。京都も大切にしながらふるさとにあるよさを存分に活かしたいと思

っています。

同窓生とついで父兄とついで

第49回卒（昭和33年）

堤 中村 悟

昭和二十七年四月野木小学校入学、同級生が十八名（現在はこれより少ない生徒数である。）随分昔の事である。ポツリポツリと思い出す事は一年生の時だったか小浜公園に大相撲の巡業があり全校生徒が見学に行った時、ある関取が前列にいた私の帽子を「チョット借りるぞ」と言っ

て取り余興されたが、その帽子は返って来なかった。最近ある集まりの時、懐かしんでこの話題を出したところ「わしはあの時上級生としてその後ろの方にいたんだおぼえていぞ。」といって話はずんだ事があった。

また、唯一の楽しみであった給食時のパンと牛乳（粉乳を溶かしたもので匂いが強く飲まない生徒もいた。家庭では牛乳などとても飲めなかった時代である。）苦い海人草の服用、武生の神社裏への杉葉拾い、夏は北川で泳ぎ、冬は竹で作ったスキー、また時には水田に積もった雪は凍っておりマントを風に靡かせながらこの上を歩いて学校へ行った事もあった。（最近温かいのか出来ない様だ）

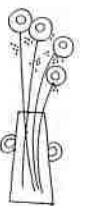
学校から帰れば現在の様に塾などなく、春はレンゲ踏みや田植え、秋は兄弟で稲掛けや脱穀後の稲藁片付け等、夜遅く迄よく農作業を手伝わされたものである。

何年生の頃だったか全校生徒が講堂に集まりタオルや専用タワシで乾布麻擦をした事も思い出の一つである。

とにかく野木も山も集落内も熟知し、よく遊んだ事だけは覚えている。

誰でも野木に生まれ育った人は例えお爺さんお婆さんになっても一二〇年の歴史ある野木小学校の卒業生にとつてそれぞれ心の何処かにいるんじゃない出をもっている。

私達は終戦直後生まれであり、皆が貧しかった時代を小



同窓生の一人として、また子供の父兄として今も野木小学校と何らかの関わりをもち、かつての自分を子供の背に映し出している。

厳しくなる国際社会の中、野木っ子は自然環境豊かな野

忘れられないアイス

第55回卒（昭和39年）

堤 北間輝代

木の地で「真面目に何事も一生懸命に」という先輩の意志を継ぎ、こうした会報を通じて同窓生としての仲間意識を一層深めていきたいものである。

当時の校長先生は、出口喜太郎先生。まさに校長先生という名称にぴったりの体格をしておられた。全校生徒で行う乾布摩擦、みんなはタオルや手ぬぐいだつたのに、校長先生だけは亀の子たわしの両端にひもをつけて乾布摩擦をされていた。低学年の私は、大人になると痛くないんだと思っていた。

高学年になり、ただのおてんばだった私がソフトボールのレギュラーになれて、夏休みに入っても、町内大会をひかえて、毎日毎日学校へ行つて練習した。スポーツ大好き人間になったのも、本田先生や寛先生が、仲間と楽しんでスポーツをすることを教えて下さったからのような気がする。だから、夏休みでも毎日学校へ行くのが苦にならなかつたし、グラウンドの反対側で男子が野球の練習に励んでいるのを横目で見ながら、真っ黒になつて練習した。中でもうれしかったのが、汗を流して練習していると、時々校長先生が全員にアイスクリームを買つて来て下さったことだ。その美味しかったこと、グラ

ンドに腰をおろし、先生方と一緒に食べたアイスクリームの味は何十年たつても忘れられない。

六年間、一クラス三十三名だったので、今でもクラスメイトをフルネームで全員おぼえている。春の帰り道、麦の茎を笛にして吹いていて楽しくてついたり過ぎておこられたり、夏は北川で泳ぎ、秋は武生の山へ教材のきのこ取りに行き、冬は凍った雪の上を歩き、そのうち長ぐつの中をぬらして学校にやつとたどりつき、コークスのストープで乾かした。

卒業時は、担任の本田先生を中心に、勉強にスポーツに六年間の締めくくりとして精一ぱい取り組み、何だかすばらしいクラスのように思えた。今ふりかへつても、やさしくてきびしい本田先生の教え子として、野木小を卒業できた事は、クラス全員が誇りに思っているのではないかと思う。

山

第80回卒（平成元年）

杉山 北浦光章

最近、登山に興味を持ち出した。六、七月には上高地を起点に奥穂高岳、槍ヶ岳へ登った。これくらい山の山になると森林限界を越える所となり登山道は岩場でクサリ場でないといと登り降りできないほどである。疲労度は極限に達し、時折、恐ろしさで立ち眩みそうな所はあったが、美しい自然に、気分は最高。不思議と登山中は下界での悩み、時間さえも忘れさせてくれたのである。完全に、山に引かれてしまった。

私は、十八年間、山に囲まれた地域である上中、特に杉山で暮らしてきた。自分の部屋からは、いつでも山の姿を見ることができた。季節の変化とともに、刻々と変化し続ける山の姿を見て、私は成長し、ここに至っている。

今、現住所はつくば市である。つくば市は、関東平野の端に位置している。最初、新たな気持ちに胸に、いざつくば市に来てみて、まず、山がないことにカルチャーショックを受けた。十八年間上中に居たおかげで、私は、山があつて当然という先入観にとらわれているのである。完全な田舎者である。このような心境の中、敢えて、お金もかかり疲労困憊になる登山をしようといふ決意し、山にひかれてしまったのは、ほかでもない、望郷の念の表われなのだ。

という訳で、私は自然の山に挑戦することを覚えた。しかし、山に挑戦する姿は、他でもよく見受けられる。野球の野茂投手、マテソンの有森選手など、スポーツ界で活躍する人達はその典型的な例だ。目の前に立ちほだかる困難なことでも、負けずに乗り越えて成功を収める。この姿は、正に、登山の姿だ。

そして、私もまた、登山と同じように、日常生活の場で越えなければならぬ山が見えてきた。成人式である。式自体は、困難なこととは言えずが、精神的に、成人と認められるかとなると



非常に困難なことである。何を以って成人と見なすのか。また、人それぞれによつて、見方が違ってくるだろう。今のままでは、経験も、勉強も不足している為、答えは分らないかな、と思う。

図書室と本と私

第80回卒（平成元年）

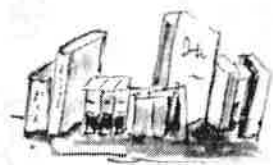
下野木 田中多恵

方がいいかもしれない。人生はこれからだ。幾つもの『山』を越えれば、分らないでもない、自然と身に付くのではないかな、と思う。

私が小学校で一番好きだった場所は図書室だった。どれだけ好きだったのかと言え、休み時間や昼休み、放課後に足を運ぶくらい、図書室の掃除に憧れるくらい、図書委員を何度も務めるくらい好きであった。今ではどうかかわらないが、そこは三階の奥にあった。白い引戸を開けると多くの本が目飛び込んでくる。鼻につく古い本の臭い。押し黙ってしまう静かな空間。それが図書室の魅力だった。そして何よりも本があることが魅力だった。私は単に棚に並べられていた本が好きであつたのだ。いろいろと理由を付けたが、図書室が好きだったのは本があつたからに他ならないようだ

私は図書室でたくさんのは必要にかられて本を読む機会が増えた。そして少しずつではあるが、楽しみとしても本を手にする時間が増えてきている。そこには名譽は無い。ただ純粹に本を読もうという意思がある。

今の私には足繁く通う図書室はない。しかし、必死で読んだ小学生の頃よりも、確実に本は自分のものとなつていく。本を読み始めた動機は不純であつたし、無茶な読み方もしたが、誤つたことをしてきたとは思わない。何故なら、今の私の本に対する思いの基盤は、その時築かれたものだからだ。あの白い扉の向こうに並んでいた本に寄せていた思いと、少しも変わらないからだ。そして私自身の基本があつた。そして私自身の本が、あんな気がするからだ。



時間と共に、私の読み物は絵本から活字へと変化した。そして本を借りるペースも落ちた。しかし読書は続けていた。ところが中学生になると図書室は私から遠のいた。従つて本も速のいた。それは高校でも同様で、マンガをただ貪るように読んだ。現在、大学生となつてからは必要にかられて本を読む機

児童読書感想文

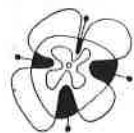
（県入選）

「はなのあなのはなし」をよんで

一年 もりおか さきこ

おとうさん、わたしは、このほんをよんでおどろいたことがあります。はなのあなには、いろいろなかたちがあることをしりました。

わたしは今まで、はなのあなは、みんないっしょだとおもっていましたが、それは大きなまちがいでした。いろんなことがわかつて、ほんとうにうれしかったです。たとえば、おとうさん。わたしはみんなのまえでおならしても、はなのあながつまっている、わたしのおならは、くさくないんだって。それに、はなすことばが、はっきりしなくなるとかいてありました。そういえばおかささんがかふんしょうのときは、「はだがつばって、えだい」（はながつまつてえらい）。といっていますね。それから、わたしがほいくえんにいっていたころに、あ



くわかりました。いきをしたときに、くうきがのどにはいらないければ、いみがないからだとおもいます。それに、くちからたべものをたべたときのどとくちがつながっていないと、たべたものがあまりはいらなくなるからだとおもいます。というわけで、はなとくちとのどは、つながっているとおもいます。

がつこうで、じびかけんしんがあつたときに、ひとりのせんせいが、せんぶいっぺんにみたらおどろきました。それは、みみとはなとくちとのどが、つながっていたからなんです。

このほんをよんで、はなのあなは、すぐたいせつなことがわかりました。はなのあなだけではなくて、からだにあるいるるあなは、みんなとてもだいじなものだとかいてありました。だから、いつもきれいにしておこうとおもいます。おとうさんもだいにしておいてね。

ところでおとうさん。へびには、はなのあながあるんでしょうか。わたしはないとおもいます。ほんとうのへびはみるだけできもちがわるいで、こんど、ほんでいっしょ

にしらべてください。

「いもむしのうんち」を読んで

二年 内藤 じゅん



ぼくは、今まで何回もいもむしのうんちを見たことがあります。でも、どんなにおいがするんだろうと、においをかいでみたこともないし、さわってみようとも思いませんでした。でも、「いもむしのうんち」というだいな名を見ておもしろそうなのと、いもむしのうんちのことをもっと知りたくなって読んでみようと思いました。

読んでわかったことは、いもむしのうんちはころころうんちで、くさくないということです。ふつう、うんちというものはくさいものと思っていたのに、ふしぎでした。それより、さわるとびゅつとつを出し、はなにつんとくるつよいにおいを出すことです。このにおいは、どんなにおいなんだろう。こんど、いもむしを見つけたら、ぼうでつついてにおいでみようと思いました。

この本でおもしろかったと

ころは、いもむしがうんちをしたあと、ふるつと左右におしりをふるという事です。これも、こんどせつたいに見てみたいと思いました。ほかにも、いるいるおもしろいことがわかりました。それは、うんちがうまく出ないと、からだをぐんにやりおりまげてうんちをくわえてもへいきなのは、においがしないからかな。

また、うんちのでそうないもむしは、おなかが黒つぶく見えて、いよいようんちが出るときは、おなかがふくらんだり、へこんだりするという事です。いもむしも、うんちをするときは大へんなんだなあと思いました。

それから、いもむしはぐちぐちのうんちや、大きくてやわらかいうんちをきれいさっぱり出して、からだをかるくしてさなぎになるじゅんびをするを書いてありました。からだの中に、うんちがいっ

将来の夢

平成八年度卒(第87回)

二十一名

- 。将来の夢は、プロ野球に入って、ホームランをいっぱいうつこと。 北浦 実
- 。けんどう六だんの日本一の男になっている人となたかいたい。 竹村 嘉信
- 。ぼくは、将来野球選手になってホームランをいっぱい打ちたい。 田中 貞治
- 。ぼくは、将来野球選手になって、イチローみたいになりたい。 辻本 隆
- 。家全体をつかって、ミニ四駆コースをつくって子供と走らせる。 山田 裕介
- 。ぼくの夢は、ゲームソフトをつくる会社の社長になることです。 東 尚孝
- 。将来の夢は、プロ野球の選手でホームランをたくさんうちたいです。 勢馬 邦生
- 。将来は、野球の選手になって、いん退したら、芸人の人になりたい。 新田 真之
- 。ぼくは、どこかの社長になってビルをたてたいです。 倉谷 勇太
- 。ぼくはプロ野球選手になって打たれないピッチャーになりたい。 福住 恭己
- 。ぼくは、サッカーせん手のとく点王になりたいです。 田中 良樹
- 。ぼくは、将来、大きい会社の社長になって大もうけをしたい。 倉谷 和幸
- 。私は保母さんになりたいです。子供たちと遊んだりしたいです。 桑原 征子
- 。私の夢は、美容師です。みんなのかみの毛をきれいにしたいです。 西 あゆ美

ばいのこつているとおもいから、チョウになつてとぶことができないのかな。なんだかふしぎな気もちになりました。また、さなぎになるまで、五回もだっぴすることもびっくりしました。

そして、さなぎになつてから二週間たつて、さなぎの色が黒っぽくなつてきました。さなぎのせなかがりつとわれて、いよいよチョウのたん生です。アオスジアゲハのせい虫です。ちよつぱり気もちわるかつたいもむしから、きれいなもようをつけたチョウがたん生したしゃしんを見て本当にふしぎな気もちになりました。よう虫から、せい虫にかわる虫はいろいろしてゐるけれど、食べものも、形もこんなにへんしんするなんて……。

ぼくは、つぎに、チョウのうんちはどんなうんちなんだろうと思つて、わくわくしながら読みました。すると、チョウのうんちは、おしっこみたいなさらさらうんちでした。花のみつをすつているからかな。においはあまりにおわないなかな。今まで、いもむしにきょうみがなかつたけれどこの本を読んでいもむしを早

く見つけて、かんさつしてみたくになりました。そして、いもむしを今までとはちがつた気もちで見られそうな気がしました。

「大五郎は天使のはねをつけた」を読んで

三年 辻本ゆみ

わたしは、この本を読んでみてとても感どうしました。このお話は、重度のきけいザルと、それを見守つた家ぞくのあたたかく悲しい一年四カ月の日記帳、作者の足あとなのです。

この子ザルが大谷家にもらわれてきたのは一九七七年七月十五日。後足は、つけねからまったくありませんでした。前足は手首まで。それも、ま

がつていてまっすぐにのびてはいませんでした。もちろん指は一本もありませんでした。「重度のきけいザルなんだ。二、三日しか生きられないかもしれない。」

「わが家で育てるよ。」
だんなさんにそう言われて大谷さんは、とてもおどろかれました。そしてこんな死んだように動かないサルをどうあ



つかつていいのだろうと、とてもまどわされたのです。「めんぼうにミルクをふくませてのませるんだ。」

だんなさんに言われて大谷さんはミルクをのませてみた。三十分かけて、ほんの少しいその時から、大谷さんにとつて、四人目の子育て、しかもそうぞうもしなかつたくらいたいへんな子育てが始まったのです。

子ザルには、「大五郎」と名前がつけられた。親がなくとも子は育つ、また、親がなくとも強く生きてほしいとだんなさんがつけた名前だ。しよくじも、ねるのも、買い物も何をするのも、大谷さんは大五郎といっしょで、三人の子どもにとっては、お母さんをとられてしまった感じがして、やきもちをやいてしまつ

- 。私は保母さんになりたいです。小さな子供達と仲良くしたいです。 山田 圭子
- 。わたしは、曲の作詩、作曲をやってみたいです。 奥本 喜子
- 。ゲームプログラマーかグラフィッカーのどつちかになりたい。 居 関 真澄
- 。私は、将来ケーキ屋になって、工夫したケーキを作つて売りたい。 植野 江美
- 。お母さんも、看ごふだつたから、私も看ごふになりたいです。 大橋 亜紀
- 。わたしは、保ばさんになりたいです。小さい子と遊んだりしたい。 清水 規恵
- 。私の夢はほばさんになることです。やさしい先生になりたいです。 小谷 朋恵



野木小学校 修学旅行団 於 東大寺 平成8年10月4日

くらい、一生けんめいなものでした。

日がたつにつれて、大谷さんと大五郎は本当の親子のようにはふかいきずなでむすばれていきました。「大五郎」とよぶと、動けない体で、一生けんめいこるがります。手足が奇形のため、とんでもない方向にいったりもしました。けれども家ぞくの人たちのふかいあいじょうで、見守られくんれんをした大五郎は、立ったらずわったりまで出来るようになったのです。ちのつながらった本当の子どものようにして大五郎は育てられました。

天国へ、たび立つその朝も家ぞくみんなに見とられ大五郎は死にました。「大五郎は天使のはねをつけた。」

このだい名には、奇形で生まれてきて、それでも一生けんめいに生きた大五郎への、ごほうびの意味がこめられています。

奇形ザル、大五郎の生きてきた一年四カ月は、わたしに「いのちの大切さ」をおしえてくれました。わたしには、父母からもらった手足が、ちゃんとあります。できないと

あきらめてしまう前に、大五郎のことを思い出して、がんばろうと思えました。そして人間の出す「こがいがい」で、体にいるいるな奇形をもって生まれてくる動物たちのいることを、わすれてはいけな



会誌購入依頼

一昨年度発行の同窓会誌第三号が相当数残っております。地元会員の全世帯と希望者の方にお届けしましたが全会員へのお知らせが不徹底で発行の事実をお知りにならない方もおられるものと思われ

銀賞

いく絵の手じゅつ

二年 田中 しゅんや



家庭の日啓発作文(町コンクール入賞作品)

「いく絵、入いんするんやで。」ねるときにおかあさんがとつせん、話し出しました。ぼくは思わず、「なんで。」と聞きかえすと、おかあさんは、

「おなかをきらんなんのや。ヘルニアというびょう気で。しゅん、おりこうにしとってよ。」

と言いました。ぼくは、(あんな元気なく絵がなんで。)と思えました。

七月三十日の朝、おかあさんといく絵は、大きなもつをもつて、びょういんへ行つてしまいました。ぼくは、とてもさみしくて、何をしても、それでもおもしろくありませんでした。

つぎの日の朝、いよいよ手じゅつということで、ぼくはおとうさんとびょういんへ行きました。いく絵は、大きな

た。その日のよるは、とてもしずかでさみしかったです。おじいさんとおばあさんは、何一つしゃべらないで、テレビを見ていただけでした。

おとうさんは、よ中に帰ってきました。いく絵は、手じゅつのあとねつが出て、それでぐずって、二回もぎやくを入れたそうです。とてもくるしかつただるうなあ。

あくる日のよる、いく絵が帰ってきました。おなかには大きなガーゼがはってあつてびっくりしました。そして、おふるに一週間も入れないと聞いて、ぼくはもつとびっくりしました。

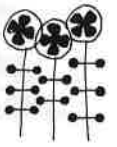
いく絵は、何もなかったみたいにお見まいにもらつたぬいぐるみで、楽しそうにあそんでいるけど、ぼくだったら手じゅつがこわくて、ないてしまうかもしれませぬ。

ぼくは、かぞくが一人でも入いんすると、みんなが心ばいするし、とても大へんなことがわかりました。また、早くいく絵と海やプールに行つて、思いっきりあそびたいです。

銅賞

うめぼしつけ

四年 西 理 江



わたしは、お父さんとお母さんでうめぼしつけをしました。さいしょは、屋根から木やブロックをおろすので、あぶないので、おろしたりできませんでした。それが終わったら、なやにうめぼしをはこぶ仕事がお父さんの初めての仕事でした。うめぼしは、赤くほっぺみたいないろをしていました。しそは、ほりほりしていておせんべいでした。弟が、

「これ食べてみ、おいしいで。」と言いました。わたしは、「つけるほうが、おいしいで。」と言ってしまいました。お父さんが、

「このうめは、いつかおいしいうめになるんだよ。」と言っていました。こんどは、たるの中に、入れるさぎょうです。お日さまにあたってうめぼしを、たるの中に入れると、わたしは、おいしくなあれ、おいしくなあれ。」と言っておまじないをしました。たるの中に入っていてか

たまっているのをなめたら、しおからかったです。うめぼしを入れていくと、「ポチャン、ポチャン」と音がしました。しそがあまったので、もう一回たるの中の石をあげることになりました。わたしが

お父さんに、

「おもしろ、どうしてそんな、おもしろもてるん。」と聞きました。それから、おもしろの石をたるの中に入れてました。わたしが、

「今から、どれくらいたてば食べられる。」と聞きました。そしたら、お父さんが、

「おぼんすんでからやな。」と教えてくれました。弟が、

「うめぼしってなんですっぱい。」

と言ったら、お父さんが、

「それは知らん。ぼく考えてみ。」

と言いかえしました。やっとうめぼしをつけたら、あせが

るの中にはいったのかなと思いましたが、ふいてもふいてもあせがでてきました。あつくて、あせが、いっぱいだけど、うめぼしは、つけるまでお日さまにあたってあつきたらうなと思いましたが、わたしは、たるの中にはいつているうめに、がんばれおもしろくなれとおうえんをしました。でも人間は日焼けをして、うめは、日焼けじゃなくて赤焼けなのかな。お父さんが、

「おいしくなつてほしいな。」と言っていました。うめぼしは、しるの中でずずしいだるうなと思えました。お父さんが、

「あつかったけど、よくがんばったな。」

と言っていました。



銅賞

白山登山

五年 倉谷友季



わたしは、白山へ一度、三年生のときに登ったことがあります。

八月二十五・二十六日に、お父さんと弟と友達とで白山を登りました。

最初は友達と登っていたらお父さんたちが、

「早いで！」

と言います。わたしもちょっと早いかな、と思ったけど、みんなについていった方がいいと思ったのでついていきました。

しばらくしたら、お父さんたちがみえなくなりました。まっていたらお父さんたちが来て、お茶を飲んで休けいしました。お父さんは、

「だいたい三十分登ったら休けいしようか。」と言いました。わたしもその方がいいと思います。なぜなら、三十分ほど登ったらつかれてくるからです。

あめをなめながら登りました。つかれてきたのか、弟の

「もう登れん。」

と言いました。お父さんが、

「ここで泊まん。」

と言いました。弟のいくやは「いやわ。」

と言ったのでお父さんは、

「だったらがんばって登んな。」とはげましてくれそうです。でも「舞空術が使えたらいいな。」と言っていました。舞空術とは、マンガのドラゴンボールGTに出てくる技の一つです。わたしもそのときはえらかったので、室堂まで飛んで行きたい、と思いました。

やっと葦ノ助まで来ました。ここで、お昼ご飯のおにぎりを食べました。わたしは、おなかがすいていたので、ここに着くのが待ち遠しかったです。おなかがいっぱいになってしばらくしてから、黒ボコ岩へ向って、登ります。黒ボコ岩へ行く中、水の流れてくる所があります。そこで休けいをして水をさわってみました。とても冷たかったです。黒ボコ岩まであと少しなので

がんばって登りました。黒ボコ岩を登ったら、雪が見えました。わたしは、夏なのにこんなにいっぱいの雪があるなんて信じられませんでした。でも、雪にさわれる、と思うと、早く登りたくなってきました。ここから室堂までは、あと少し。わたしは、友達のはしちゃんといっしょに、さきに登りはじめました。初めのうちは、平らで登りやすかったけど、室堂にちかづくとき、だんだん登りにくい坂になってきました。

室堂についたのは十四時三十五分。予定よりも二十五分も早くつきました。ねる部屋をきいて、そこで友達の実ちゃんやしほちゃんたちとU NOやトランプをして遊びました。それと、雪をさわりに行きました。とても冷たかったです。しばらくしたらおじさんが来て

「草花をふんだらだめだ。登山ぐつで三回ふむと死んでしまう。」

と、おこられました。わたしは、草花にも命があるのだから大切にせんとあかん、と思いましたが、おこられてしまったけれど、自然を大切にしなければならぬことを学び



ました。

次の日の朝、四時に起きて頂上まで登りました。曇っていたので日の出は見られなかったので残念でした。気温四度。とても寒いので早くおりました。

帰りに温泉に入って帰りました。

わたしは、わたしたちよりも何倍もの荷物をせおい、苦しい時にはげましてくれ、今回の登山を計画してくれたお父さんに感しゃしています。

また、苦業を共にする友達がいることも幸せに思いました。と中えらくて大変な所もあったけれど、とても楽しい白山登山でした。何回でも行きたいです。今年の夏休みの中で一番いい思い出になったと思います。今度は、お母さんや弟のしんべいもいっしょに登れたらいいなあと思いました。

学位取得報告

第50回卒(昭和34年)

岡本寛昭



博士論文「スリッパフォーム工法における極若材齢コンクリートの力学的挙動に関する研究」を東京都立大学へ提出し平成八年一月、工学博士の学位を取得しました。この研究は、筆者が東京都立大学大学院修了後、昭和四十六年四月から奉職した国立舞鶴工業高等専門学校において行った研究成果をとりまとめたものです。粘り強く地道に研究を続けた結果が学会で認められ、学位取得につながりました。

「継続は力なり」という先人の言葉を実感しています。学位取得は、自分一人の力で達成したのではなく、良き師に巡り会え、周囲の理解と励ましがあつたからであります。

野木小学校時代担任としてお世話くださいました中西和子先生と小谷春治先生に論文を贈呈したところ、大変喜んで下さいました。また、現在実家に一人暮らししている母は、言葉には出さないが万感迫るものがあるようです。この道

に進むことを支持してくれた母の寛容さに改めて感謝したい。

今まで受けた恩義に報いるべく、今後とも技術者教育に微力を尽くすとともに、建設分野の研究に精進したいと考えています。ご厚宜ください地域の皆様並びに同窓生各位にお礼を申し上げます。

(舞鶴市在住、国立舞鶴高専教授)

寄稿募集

わたしたちの『同窓会報』も今回で十号を数えることになりました。そこで、次号からは、ますます魅力ある会報にするため、広く会員の皆様から原稿を募集しようということになりました。おもしろいお話、体験談、思い出話などどんなことでも結構ですので、お気軽にご紹介下さい。

編集後記

今回は事務局の異動があつて、年度頭初よりやや作業面で出遅れの感があつたのですが、ようやくここに第十号をお届けすることができました。大変お忙しい中を快くご執筆下さいました皆様、本当に有難うございました。編集員一同心よりお礼申し上げます。

次回からは、会員の皆様からの自由投稿を募集することになりました。さっそく募集を開始しますので、お気軽にお寄せ下さい。

